

# 博物館だより



No.139

平成30年6月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行  
福岡県京都市みやこ町豊津1122-13  
TEL 0930-33-4666  
FAX 0930-33-4667

## ◆博物館NEWS

### ①「人類の記憶」も手軽に観覧 WEB博物館「みやこ町文化遺産 メニュー追加でさらに パワーアップ！」

博物館の公式HP「みやこ町デジタルミュージアム」のサイドメニュー「みやこ町文化遺産」は、「ガラスケースから取り出した資料展示の実現」をコンセプトに、注目の資料を高精細画像や3D画像に収めてWEB上で公開し、ふるさとの宝を身近に感じてもらうツールを目指しています。

## ②みやこ遺産の見学が便利に！ 文化財解説板を新設しました

博物館では、町内所在の文化財3件について、新たに解説板を設置しました。

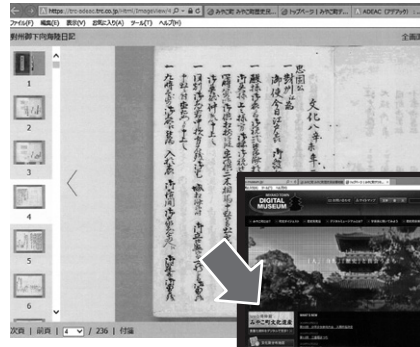
町内の文化財には毎年多くの皆さんが足を運んでくださり、博物館ではできるだけガイドを引き受けてはいますが、全員の案内はムリ。そんな折役立つ、現地の無人ガイド「解説板」。今期は次の3箇所に設置しました。

- ①小宮豊隆生家跡（犀川久富）  
夏目漱石門下の文学者生誕地を紹介
- ②木造阿弥陀如来座像（豊津）  
古刹筆高寺の本尊の来歴等を紹介



③三重塔  
町のシンボル三重塔の特色を解説

▲新設の解説板たち 左上から時計回りに②・③・①のもの



▲スタート画面(右)の矢印部分をクリックすると画像ヘジャンプ

- 主な公開資料（新規分）
  - ・小笠原文庫（錦陵同窓会所蔵）
  - ・朝鮮通信使易地聘礼記録
  - ※ユネスコ「世界の記憶」登録遺産
  - ・豊前小倉城絵図
  - ・金辺峠陣所図 など
  - ・銅製鰐口（蔵持山神社所蔵）
- コン画面で気軽にご覧いただけます。ぜひご利用下さい！



▲第2期講座での実務体験（「むかしの暮らしと道具」学習を支援）



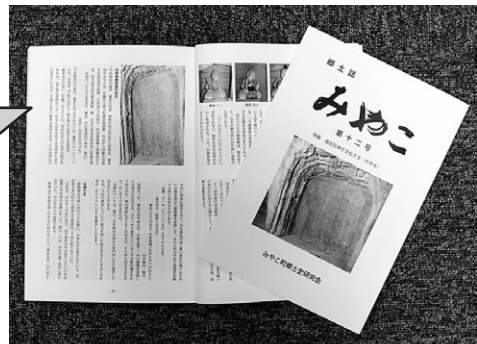
▲シンポジウムには育徳館高校生と町職員も参加しました

## 4月の業務日誌から

4月20日(金)、みやこ町郷土史研究会の皆さんが機関誌「郷土誌みやこ(12号)」を献本くださいました。ふるさとを地域密着で現地調査した成果で優れた研究誌です。皆さんもぜひご覧下さい！

4月22日(日)、エルガーラホール(福岡市)で朝鮮通信使記録の「世界の記憶」登録記念シンポジウムが開かれました。小笠原文庫所収の通信使記録の重要性が紹介され、「人類の宝」を再認識する場となりました。

- ### ◆講座・教室・催し物ガイド
- ## 6月の歴史講座
- 【漢詩紀行講座】  
6月2日(土) 9時30分
  - 【古典かな講座】  
6月16日(土) 9時30分
  - 【みやこ学講座】 ※現地見学会を予定  
6月23日(土) 9時
  - 【古文書講座】  
6月30日(土) 10時
- ※日程変更となる場合があります。  
※見学会等は別途ご案内します。



▲今号は「身近な神さま仏さま」調査シリーズの祇郷校区編



▲吉田増蔵

みやこの歴史発見伝 107  
よしだますぞう  
吉田増蔵(その一)

「昭和」の元号考案者

「平成」から新たな元号へ

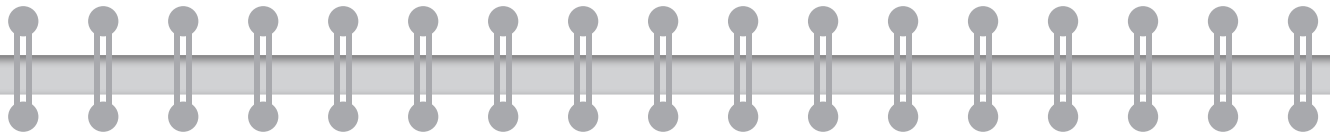
「平成」も残り一年を切り、新聞等で「天皇陛下の退位」や「改元」という言葉を目にするようになりました。「平成」に改元の際、「世界最長の元号」となった「昭和」の元号制定の経緯などを取り上げた記事が各誌面に掲載され「昭和」の元号考案者である吉田増蔵の名前を目にする機会が多くなりました。改元に伴い、今月から改めて吉田増蔵と元号についてご紹介いたします。

吉田増蔵(号は学軒)は慶応二年(一八六六)一月、現在のみやこ町勝山上田に生まれ、現在の行橋市上稗田に村上仏山が開いた私塾「水哉園」で学びました。その後、明治十

六年(一八八三)に上京。共立学校で英語を学びアメリカに渡りました。その後、明治四十三年(一九一〇)から奈良女子高等師範学校(現奈良女子大学)や山口県立豊浦中学校(現豊浦高校)で教鞭をとりました。大正九年(一九二〇)十月には宮内省図書寮(現在の宮内庁書陵部)の編修官となり、天皇・皇族に関係する業務に携わりますが、その時の上司が作家で軍医の森鷗外でした。鷗外は彼が行っていた元号研究の補助にあたらせるなど、早くから増蔵が持つ漢学の才能を認めた人物で、後に遺言書に鷗外の所蔵する和漢の蔵書を「吉田増蔵君に贈るべし。」と記していることから、その信頼の強さがうかがえます。

**元号「昭和」の創案**  
大正天皇の崩御に際して宮内大臣の内命を受けて、「神化」、「元化」、「昭和」などの元号十案を作成。これとは別に国府種徳が考案した五案と共に大正十五年(一九二六)十二月二十五日の枢密院会議に諮られた結果、「大正」に次ぐ新元号として吉田増蔵が考案した「昭和」に決定しました。この元号は、中国の経典である「書経」の一文「百姓昭明協和万邦」から採用されたもので「全ての人民は明るく全ての国は和やかに」という世界平和の願いが込められたものでした。

【井上信隆】



博物館おすすめの逸品レポート

Vol.25

この展示(& 収蔵資料)ココが見どころ、ココがツボ!!



●資料名

おたかまかきやまようくひきわたしちょう  
大熊昇山用具引渡帳 1冊

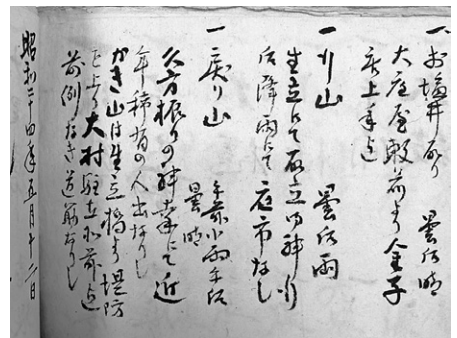
●データファイル

法量: 縦39.5/横14.2/厚さ8.5(cm)  
製作年代: 文政10(1827)~昭和50(1975)  
ポイント: 山笠(昇山)ゆかりの貴重な記録  
公開状況: 保存・収蔵用資料として現在は非展示



▲帳面の全景。148年間の山笠道具引渡の際の事績が記される貴重な古記録。現在の表紙は後年つけ足したようで、これをめくると「大熊村が記山(かきやま)…」と表記された作成当時の表紙が現れる。

▼昭和23年の奉納メモ。戦後初の奉納となり大いに賑わった。それゆえかムラへ帰る山笠は、生立橋を渡るときの先頭を務める慣わしの本庄の山笠を待ちきれず、今川土手を大村へ進んだと記す。



memo

この資料は去る5月12・13日に今年の山笠奉納を終えたばかりの大熊区から寄贈されたもので、大熊区が奉納する山笠(昇山)の備品類を、区内の奉納当番組(「当前」と呼ぶ)から滞りなく次の当番組へ引渡しましたという証しとされた帳簿です。

全部で2冊あって、うち1冊はこの帳簿の続編となる昭和51年以降の記録が記され、それとともについ最

近まで、引き渡し道具として扱われてきました。このうちの古い方を頂いた訳ですが、古色蒼然とした装いに歴史の重みを感じられます。

帳簿の記録は文政10年という江戸時代後期に始まり、昭和50年までの記録が記されますが、入念な引渡しの記録と共に、時折「記録」「日記」「其他」等と記したその年の奉納の簡単な記録があり、これが自ずと山

笠をめぐる「クロニクル」となっています。注目の記事を幾つか拾うと、①奉納日が江戸時代の8月から現在の5月になったのは明治16年。②昭和18~23は「時局(戦争)」により山笠奉納が中止となる。③昔の山笠は各奉納区から担がれてきたが、大熊区のルートは片道約2kmほど。といったものがあり、かつての山笠の姿を偲ぶ貴重な記録です。(木村達美)